

# 甲状腺原発 B 細胞リンパ腫におけるチロシンリン酸化酵素 SHP1 遺伝子のメチル化と蛋白発現消失の検討

斉藤 信明<sup>1)</sup> 中谷 陽子<sup>2)</sup> 岡 剛史<sup>2)</sup>  
大島 孝一<sup>3)</sup> 竹下 盛重<sup>1)</sup> 岩崎 宏<sup>1)</sup>  
池田 靖洋<sup>4)</sup>

1) 福岡大学医学部病理学

2) 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科病態制御科学専攻病態機構学大講座病理病態学分野

3) 久留米大学医学部病理学

4) 福岡大学医学部外科学第一

要旨：チロシンリン酸化酵素 SHP1 は各種サイトカインや増殖因子のレセプターに作用するシグナル伝達経路の抑制的な調節因子で、そのメチル化は悪性リンパ腫、白血病における増殖と活性に重要な役割をはたしている。今回我々は甲状腺原発 B 細胞リンパ腫、橋本病の組織において、メチル化特異的 PCR 法にて SHP1 遺伝子のメチル化を、免疫組織染色にて SHP1 の蛋白発現の低下を検討した。SHP1 遺伝子のメチル化は検討したほとんどのリンパ腫と橋本病で認められ、SHP1 遺伝子が本リンパ腫の重要な発症の原因のひとつであると推測された。しかしその蛋白発現の消失はびまん性大細胞 B リンパ腫の約半数に見られ、MALT リンパ腫ではほとんど見られなかった。SHP1 蛋白発現の消失は、B 細胞性リンパ腫の組織学的形態だけでなく腫瘍細胞の増殖や活性に関係していると推測される。

キーワード：甲状腺，悪性リンパ腫，メチル化，SHP1